

## A black and white photograph of a long, single-story building with a corrugated metal roof. The building appears to be made of wood or concrete blocks. In front of the building is a fence made of vertical posts and wire. Several people are standing near the building. The background shows a line of trees and a clear sky. The foreground is a grassy area with some scattered debris.

この肥えた土地は、初めでは無い。本来の持主たではない。ポルトガル人により、ホルランド（オランダ）に属する地域と呼ばれた。荒れ果てた土地へ強き移住した結果で

五時間ほど走ると、かつてのホルランド・クワックワに到着した。ヨハネスブルグから約百五十キロ、標高二千三百メートルを超える高地で、冬には雪を降る、驚くべき現象でも寒さの厳しい現存時代にはターが着してゐる人は少ない。

クロクは、六十年を超えな刻の歴史が刻まれている。農村と聞いていた

黒人たちが最下層の生活を送るスコッター・キャンプ。ヨハネスブルク郊外には、こうしたスラムが、点在している（マンデラ・ビレッジ）

られた毛布を手渡  
会会員とJHP・  
ンザニアと南アフ  
は十年ぶり。ボラ  
ことだ。アパルト

[illegible]

置き去りにされた人々に毛布が手渡されていく。毛布にくるまりながら話すइटットさんの表情からは、過疎化の中にありながらも、「自由」のある新しい時代をあるがままに受け入れようとする穏やかさが感じられた。

「マニ  
パルトヘイト」(人種隔離政策)  
アフリカは独立と同時に国連の自立支配権を立証した。種族録は、  
集團の面から、本法の三の柱となり、人種は、生活、教育、職など、  
の面でも人種的差別を受けたりする。先住民である人種は、自らの土地を  
奪われ、部族ごとにもムラドと呼ばれる荒地へ強制移住せられた。  
収心部も、黒人居住地区に集中し、その場所から人種は移住せられた。  
この人種隔離政策は、世界から非難を呼び、国内でも反対運動が激しい。  
一九九一年、アフリカ人種会議(ANC)の最高指導者、ネルソン・マンデラ  
氏(現大統領)の手に、この政策は終了した。

毛布を手に歓喜の踊りを披露する女性たち。農村では、女性と老人が目立つ

「私は、つらい人生をおくってしまったが、子ども  
や孫の人生は、明るくなると信じている」  
(デーンさん77歳、ディーブ・スクルドで)

今のところ、彼らの運賃は1つだ。都心部は仕事を練しなが、ホームレスを養うが、旧黒人居住区にブラックを建て、最悪の生活に甘んじざるをえないところでも、冬にはこの凍死は出るヨナス・スラブには、死を身近に感じる生活に変わりはない。

都心部から車で二十分も走ると、ブラックが軒を並べ、まるで立派な豪華な光景を目にする。鉄条網に囲まれたその街は、スコッパ・パークと呼ばれ、アパルトヘイトの時代、黒人居住区に住むのがない人たちが住んでいた。毛布をボランティアの三三三は、スコッパ・キャンパスの一つ、ソウトラ地区のブラック街を訪ね、思ふ存りながら歓迎を受けた。



何百人もの住民たちが一行を出迎え、歌や踊りを披露してくれた。貧しい生活にもかかわらず、お金を出さず、隊員たちの食事まで合、用意してくれた。貧困ゆえに窃盗など犯罪

「アファカヘ毛布をおくる運動」で集められた毛布を手渡すため、一月十五日から二十八日まで、本会会員と市議員P・学校をつくる会のメンバー三十八人が、タンザニアとボラリカを訪れた。南アフリカに配布されるのは十年ぶり、ボラリカに訪れたのは、初めてのことだ。アパルトヘイト（人種隔離政策）が撤廃されて八年。しかし、人々の心には、今なお傷を残している。その傷を癒すのに毛布はどうかかわっているのか――。

(2面に関係記事)

いわれているソウエト地区。しかし、都心では感じられなかった人の心の温か



パワーパークの社長、  
 リナ・メジエバさん  
 〇〇は、小さな雑貨屋を営  
 んでいる。雑貨屋にいつ  
 も、店番はなくては、薄暗い  
 毛布のともにも、日本の人  
 たちの手は、暖かの手  
 によって暖かに届けられ  
 た（フライン・タウ、  
 ヤマニール）

バラックのつり棚に、キエ  
 デーやたばこ、けだん少  
 し並んで、おぼろげに  
 覗くと、彼女が口もり  
 言葉で、彼女が口もり  
 言葉を話していた。  
 彼女は未婚だった。一人娘  
 はすでに嫁ぎ、たった一人  
 で暮らしていた。隣に父  
 女は、彼のおよそ十歳  
 の母は少し足りない。

[illegible]

「日本から来たのかい。数系の教育は、全く受けそ

てたものだ。現在、一年生から三年生まで、二百二十人の生徒が在学している。古い工場を移築したトタ



たとき、南アフリカ人にな  
ると、子や大人になら  
なくて、かわるかわら  
ないでいるのだろうか。  
そして、毛布が果たぬ役柄  
は、ほどほどのものになら  
ないだろうか。

フヤニ小学校の男塾教頭  
は、毛布について「語  
た。」「厳しい冬の寒さ  
の毛布はなくてはあが  
ない。でも、追善を受け  
たれしにに、もつと  
うれしいは、私たちが  
つてくれる人がいるこ  
す。」

毛布をかぶり、はしゃ  
でいる。小さな希望たち  
は、皆、無邪気に笑っ